

都野神社の「供香献額」について（調査メモ）

長谷川 一夫

1. 「洛南男山神楽の御神事、当社も御一体分身」について

「洛南男山」は、京都の石清水八幡宮のこと。貞観元（859）年、行教上人が宇佐八幡宮で神託を受け、翌2年に山城国男山の峰（鳩ヶ峰、標高143メートル）に八幡大神を勧請したことを創祀とする。祭神は「誉田別命（応神天皇）」と「比咩大神（多紀理毘売命・市寸島姫命・多岐津比売命の3柱）」と「息長帯姫命（神功皇后）」。「神楽の御神事」は、石清水八幡宮では八幡大神が宇佐の地に出現された旧暦2月上卯の日、「御神楽」が奏される。

「当社も御一体分身」は、都野神社の祭神「筑紫宗像姫三柱之大神 合殿 息長姫大神・誉田別大神」をさす。

2. 額に登載された人物について

前波善学『与板史 こぼれ話』は、額にみえる諸氏のうち、江口・三輪・山田の当時の豪商とその分家、京坂・江戸から招聘された茶人、ならびに豪商の財力に着目されている。当時の与板の香道、香筵の全体像を知るうえで、前波氏が着目した以外の人びとについても考える必要がある。

内山・奥山・内藤・斎藤・江原・河西・大澤ら7人の姓は、与板藩の分限帳や旧与板藩士卒録にみえる。与板藩の分限帳は通称で表記されているので、額に示された「名」が特定できないでいるが、該当すると思われる人物の候補を列記すると以下のようなになる。

内山 充美	与板藩（100石）内山文蔵 or（70石）本々内山弥兵衛か。
江口 朋光	東備前屋初代 名弥兵衛。
三輪 弘高	大坂屋「丸ろ」三輪家分家、藤右衛門弘高。町年寄。
山田 重記	和泉屋山田家8代太郎兵衛重記。与板藩に家中として召抱えられる。良寛と親交のあった重翰（杜阜・与板藩物頭次席）の父。
江口 充興	備前屋の系譜か。
三輪 ながもと 長旧	大坂屋本家「丸い」三輪家5代三輪九郎右衛門。
奥山 正秀	与板藩（150石）奥山与左衛門 or（50石）奥山伴蔵か。
内藤 定賢	町医師のちに藩医 内藤祐益か。
斎藤 吉峰	与板藩（100石）普請奉行・斎藤源五左衛門 or（切米取小役人）斎藤又右衛門か。

追加 一炷焼供香

江原 利正 与板藩（250石）用人・江原二右衛門。

河西 久隆	与板藩（200石）供番・給人・河西所右衛門。
大澤 幸隆	与板藩（150石）大澤平右衛門。
田母神成鄰※1	与板藩（切米取）馬役田母神雲八。
長明 善康	与板・長明寺9代住職。
守随 信※2	東武
空花 恵南	洛陽
杢金 成政	浪花
大口 樵翁	浪花 茶人。元禄2(1689)年、大坂に生まれる。名は保為。含翠、養浩齋、芳林庵、如心軒、含翠庵と号す。石州流を大西閑齋に学び、その娘婿となるが、のちに破門されて大口派を開く。明和元(1764)年12月6日没。76歳。著作に「逆流玄談」など。

※1・※2 委員会の検討過程で解明された資料に基づく。

3. 香許の内藤氏について

香道は天然香木の香りを鑑賞する芸道といわれ、香木として用いられる沈香、白檀などが有名である。沈香は強壮、鎮静などの効果のある生薬として利用される。その上質のものは伽羅という。白檀も止痛、健胃作用があり生薬として利用される。それらを取り扱う者として医者や薬種業者も想定される。

香許（香元）の内藤については、与板町には内藤祐益という医者がおおり、内藤氏は「寛延三年与板分限帳」には見えないが、後に与板藩医に任用されている。この祐益について後考を期したい。

4. 江口・三輪・山田の豪商について

与板の豪商のほとんどは、牧野家の町づくりと前後して与板に移り住んでいる。のちの廻船問屋備前屋は「寛永末年（1643）」、大坂屋三輪家は「万治2年（1659）」、和泉屋山田家はそれ以前に与板村原に与板に移り住んだという。

大坂屋三輪長旧家も宝暦年間の全国の長者番付にあたる「七福仁之内」の3番目で「所持の金子60万両、江戸表の御用金は80万両にのぼった」と称される豪商である。なお、山田については史料が散逸して不明。

5. 奥山・江原・斎藤・内山・河西・大澤について

奥山・江原・斎藤・内山・河西・大澤のうち、奥山・江原・斎藤は、彦根藩から与板藩祖井伊直勝が上州安中藩3万石に分知された際の「井伊右近太夫直勝公江州彦根ヨリ上州碓氷郡安中へ御引越之節、彦根ヨリ御供之衆之覚」に見える人物の系譜である。井伊谷ないしは箕輪に遡る井伊直政当時の家臣の後裔である可能性が高い。内山・河西・大澤も「供番」として「宝永三丙戌年与板分限帳」に

見え、掛川藩以前に遡る可能性の高い家臣の系譜である。

おそらく日々の暮らしの中で、武士の嗜みとして香道に親しんでいたのではないか。守随・空花・杢金・大口らの招聘は豪商の資金力によると思われる。与板の香筵は与板藩士と与板町人らの交流の場であり、与板藩士と与板町人がつくりあげてきた文化ではなかったか。

参考；「明治16年神社明細帳」『編集紀要 町史よいた』第2集 1991。

「寛延三年 与板分限帳」(1750)『与板町史資料編上巻』1993。